

3. ブラショフ

雲助タクシー

11月19日には快晴が戻ってきた。この日はブラショフへ移動するが、宿にチェックインする時間を考えて11時22分シナイア発の列車で行くことにした。ちなみにブクレシュティ、ブラショフ間を結ぶ便は1日18本あり、急行だと所要時間が2時間40分程度、いずれの列車もシナイアに停車し、シナイアからは1時間ぐらいで行ける。

せっかちな性分ゆえに、早々出かけて駅や空港で長々待つ仕儀となるは度々書いている通りだが、今回はやせ我慢をして私としてはぎりぎりまで部屋で過ごし11時に出発した。ところがチェックアウトしようとフロントへ行くと、こんなときに限って誰もいない。周辺を探してホテルのスタッフは見付かったものの彼女はフロント業務は担当範囲外らしい。それでもあちらこちら担当者を捜し回ってくれた。

間もなく一昨日にチェックインしたときのオバサンが戻ってくる。ようやく料金精算を開始。2泊の料金は税金などを合わせ281.48lei(6,105円)だった。このロスタイムで余裕がなくなってきたのに、裏口から駅へ向かうと、相変わらず工事中の溝に邪魔され、100メートルほどの迂回を余儀なくさせられる。あたふたとキャリーカートごとカバンを持ち上げ階段を降り、それでも駅前道路を渡るときは左右の安全を確認してから渡った。ちなみに日本では右左だがヨーロッパ大陸では左右の順に確認しないと危ない。

幸い切符売り場では待たされずに済む。用意しておいたメモを見せて、ブラショフまで45キロの2等急行指定券を16.3lei(354円)で購入。時計を見ると11時10分だ。やれやれの気分でもコンコースを出ると、向かいのホームに下り(ブラショフ方面)列車が滑り込んできた。定刻より早く通過するはずはないと思うが、それは日本の常識でルーマニアでは通用しないかもしれない。

再びあたふたと地下横断通路を急いだが、向かいのホームに出たのは、列車が走り出した後だった。ともかく現況を把握すべく辺りを見回すと、国鉄職員の制服を纏い、制帽に赤い帯が入ったのを被った女性がいる。駅長だろうか。ともかく彼女に切符を見せると、此処で待てば良いと身振りで示してくれた。やっと本格的に一息つき、「やはり大幅に早めの行動が適している人間なのだ。」と独りごちた。

余裕を取り戻し、ホームや案内表示などを撮影する。18分に下り列車が到着した。



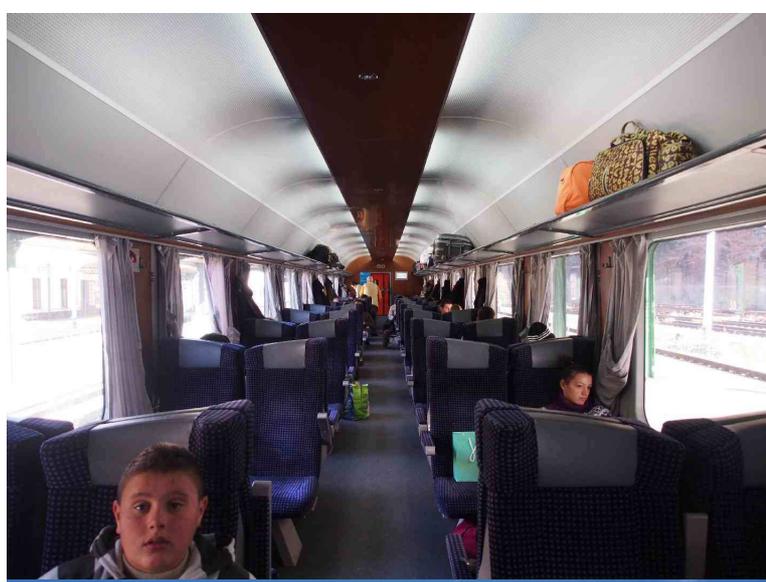
上: プラットホームの案内表示。下: ブラショフ行き列車。

列車は4分間停車し、定刻通り動き出した。指定されたのは3号車の22Eで、進行方向左手の席だった。走り出して数分で雪を戴いたピークが青空を背景に聳え立つのが見える。窓ガラスが汚れているのが残念だけれど、とにかく数枚撮影。グーグルマップによれば標高は二千メートルほどだが、名前は判らなかった。

シナイアから上り坂がずっと続き、次の停車駅はブシュテニで標高は千メートルを越えている。この村もルーマニア有数のリゾート地らしいが、ペンションやプライベートルームが主流だそうだ。

此処が鉄道の最高地点であとは下るばかり。二駅ほど途中停車し、今度もまた定刻の12時24分到着だった。鉄道路線はブラショフで4方向が交差している。今朝利用したブクレシュティからシナイア経由の線は、シギショアラを経由してブダペストに至り、先日夜行列車で通過した。それ以外に西へ向かいシビウなどに至る線と、北へ向かう線を合わせ4本だ。駅の規模も大きく、プラットホームも4列あったが、全体の雰囲気は古びている。

地下の横断通路を経由して駅のコンコースに出た。ビル3、4階に相当しそうな吹き抜けで、これもまた竣工時には時代の先端を行く華やかさがあったかと思われるが、いまや良く云えばレトロ、けなすならば時代遅れの感がする。コンコースを出て右へ行くとタクシー乗り場で、周辺に運転手がたむろしているが、どうも雰囲気が良くない。



上：車内。下：走り出して数分後に見えたピーク。



ブラショフ駅コンコース。

この街で泊まる宿は駅から3キロほど離れている。Booking.comで見付け、予約を完了後に、宿に宛ててメールを送った。駅から宿までの一般的タクシー代を尋ねたのだ。折り返しのメールで、お奨めタクシー会社と、「料金は最大で10lei(217円)．．．」と教えてくれた。

ちなみにタクシー利用時に日本なら順番に乗るものだが、海外では勝手に選んだ車に乗り込むことが多い。ルーマニアもそうだ。しかし何となくガラの悪い運転手達に方々から声を掛けられタクシー会社を選ぶ余裕はなかった。

ブラショフ

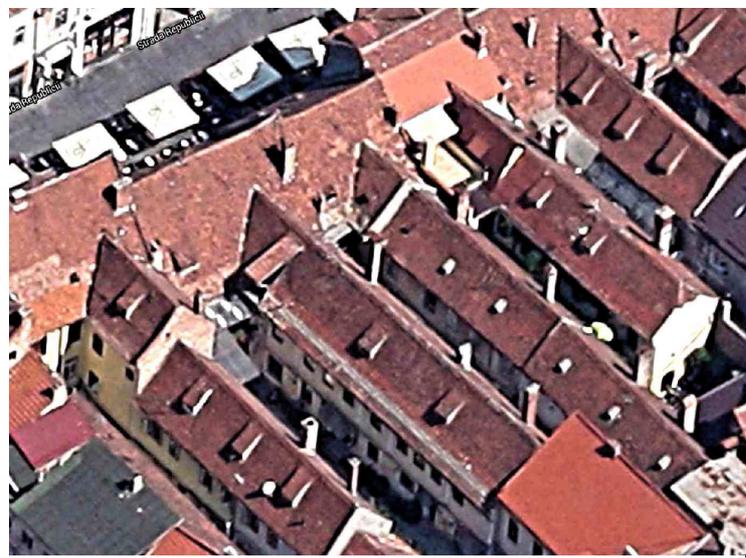
ブクレシュティの北約140キロに位置しルーマニアのほぼ中央にあたる。古代ダキア人が居住していたとの伝説もあるが、歴史的にはっきりしているのはハンガリー王ゲーザ2世に招かれたザクセン人により発展した以降だ。13世紀に入りハンガリー王エンドレ2世の命でドイツ(チュートン)騎士団がこの辺りに要塞を築き、その周辺に入植者を連れてきた。

1225年に騎士団は退去させられたが、その後も入植者は残り、ブラショフの三箇所に住定する。オスマン帝国隆盛時には、地理的に西欧と帝国を結ぶ交易路上にあったため栄えた。しかし当時のルーマニア人は市民として認められず、市内で商いや居住が許されず、正教会も作るができなかった。

時代と共にルーマニアの体制は変化した。ドイツ系住民の地位は一貫して優位にあった。しかし第二次大戦後、ソビエト連邦により多くのドイツ系住民が追放されたり、共産主義体制を嫌って西ドイツへ移住したりする。

現在は人口28万弱で、ルーマニア8番目の都市。1850年は4割を占めたドイツ系住民は、2002年の国勢調査で0.6%まで減少し、9割がルーマニア人、1割弱がマジャール人となっている。

地理的に国の中央であり、街並みの保存状態も良いため訪れる観光客は多い。



旧市街は表通りから狭い通路で中庭に入る。ザクセン系市街の特徴か。

ともかく声を掛けてくる連中は避け、車内で客待ちしている比較的真直そうな運転手を探して乗車する。宿からのメールで教えられたマダロム(Modarom)を告げる。すぐ発車したが進行するに従い、方向音痴の私でも、遠回りしたように感じた。夕刻、宿で落ち着いてGPSの軌跡を調べると、案の定最短ルートならば2.8キロのはずが、これを外し4キロも走っている。

その結果料金は15lei(325円)となった。

絶対額にすれば僅かなものだし、相対的に金持ちで、強く自己主張しない日本人がカモにされるのは仕方ないのかもしれないが不愉快なことだった。

マダロムが旧市街の北側入口と云ったところらしい。石畳の共和国通りは幅10メートルほどあるが歩行者専用だ。ちなみに地名かと思ったマダロムはこの通りと幹線車道の角にある6階建て円形ビルに入居するファッションセンターの名前だった。



宿のある中庭への通路。中庭の左手に宿のフロント、突き当たりの2階が寝室。

共和国通りを250メートルほど行くと左手に今日の宿カサ・アルバートの看板が見えた。建物に設けられた幅2メートル弱の通路を抜けると細長い中庭に出る。この中庭に面して棟割り長屋的に玄関を持つ6、7世帯が原型らしい。今は住民が替わったりしてオフィスや宿になっているが、もとのままかはともかく個人住居として使われている一角もあるようだ。

再びカサ・アルバートの看板がある玄関に入ると、フロントを兼ねた事務所がある。良く判らないが宿泊業は片手間でそれ以外の仕事が主らしい。予約確認が出来て部屋の下見をする。棟割り長屋の一世帯分を、あまり弄らず内装や浴室を整備して宿泊できるようにしたらしい。オーナーか内装担当者は強い個性持ち主なのか、快適ではあるが一般の宿とははっきり異なる印象を受ける。浴室の銅製バスタブや水栓などはアンティーク調のものだが凝り過ぎで使い難かった。



上:寝室。壁には手書きの絵がある。下:浴室。凝ったバスタブだけれどシャワーカーテンがないので使い難かった。

ブラショフ平面図

0 400m



スファトゥルイ広場

ともかく部屋が決まりチェックインを済ませた。部屋で一息ついてからメールをチェック。何通もあり、大事なものはなかったが以前作成したソフトに関する問い合わせがあったりして返信を書く。一段落してみれば、時刻は既に1時半だ。空腹も覚えたし、せっかく戻ってきた青空を無駄にしたくないので、ざっと荷物を片付け外出した。

最初に目指したのはビストロ・デラルテだったが、生憎休業だった。そのまま細い路地を進むと、すぐにスファトゥルイ広場に出る。台形の石畳広場はその面積がおおよそ1万平方メートルで旧市庁舎がその中に聳えている。雰囲気としてはドイツ風だと思うが、街を築いたザクセン人はドイツ北西部の民であり、そちらの方を旅したことがないからかなりいい加減な感想だ。北東側にカフェが4、5軒あり、どの店もテラス席を設けていた。

気温は低めだが陽射しは暖かく風がない。久しぶりに屋外で食事をするのにおあつらえ向きだ。適当に空いているテーブルを見つけて坐った。すぐにウェイトレスが英文併記のお品書きを置いてくれる。ざっと目を通し、スパゲティ・フルッティ・ディ・マーレ(海の幸スパゲティ)とワインの赤をグラスで注文した。

ワインを飲みながら10分以上待つ。この辺りでもちゃんと注文を受けてからスパゲティを茹でているのだろう。運ばれてきたフルッティ・ディ・マーレは見たところ確かに海の幸スパゲティで味もそこそこ良いけれど、なにかシチリアで食べたスパゲティなどとは違い、「日本の喫茶店で出すようなスパゲティかな。」と思う。オリーブ油とニンニクの使い方が少ないせいだろうか。



上:スファトゥルイ広場のテラス席。下:そこで食べたスパゲティ・フルッティ・ディ・マーレ。

ワインを飲みながら10分以上待つ。この辺りでもちゃんと注文を受けてからスパゲティを茹でているのだろう。運ばれてきたフルッティ・ディ・マーレは見たところ確かに海の幸スパゲティで味もそこそこ良いけれど、なにかシチリアで食べたスパゲティなどとは違い、「日本の喫茶店で出すようなスパゲティかな。」と思う。オリーブ油とニンニクの使い方が少ないせいだろうか。



宿泊施設玄関ホールの壁に手書きされた幻の通路。



存在感のある魅力的な人だったが、ヘビースモーカーでタバコの煙が途切れることがない。嫌煙者には近寄りたくない人だ。

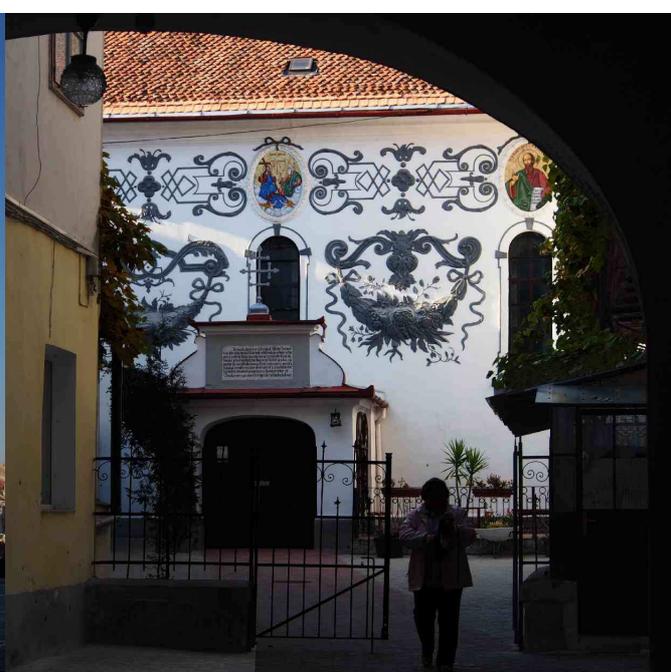


スファトゥルイ広場と旧市庁舎。

ワインを1杯追加してスパゲティ350g(原材料ではなく調理済み完成品重量)を完食した。勘定は勘定はスパゲティ・フルッティ26lei(564円)、ワイン2杯14lei(304円)で、別途コイン2lei(43円)をテーブルに残す。食後に散歩気分でスファトゥルイ広場から、黒の教会、三位一体正教会などを巡る。明日一日掛けてじっくり見るつもりなので、散歩は10分ほどで終わった。宿へ戻って一眠り。

3時をちょっと過ぎて今度は買い物がてら散歩に出かける。やはり自然に足が向くのはスファトゥルイ広場だった。此処は単に位置的なものが中心と云うだけでなく、人を引き寄せる引力を持っているようだ。南西側にある黒の教会や、それと対称的な位置に在る正教会カテドラルなどを遠望しながらそぞろ歩き、広場のすぐそばにあるスーパーマーケットに入った。

買ったのはトマト224g1.41lei(31円)、牛乳1ℓ5.8lei(126円)、ヨーグルト140g1.5lei(33円)、ヨーグルト140g1.8lei(39円)、チーズ味棒状クラッカー(プリツタイプ)100g2.7lei(59円)、ロールパン1.8lei(39円)、ウオッカ(フィンランドニア)1ℓ83lei(1,800円)など。98.01lei(2,126円)をカードで支払う。



1768年の創建の三位一体正教会。瀟洒な外観で街路から引込んだところにひっそりとある。P.135のコラムにもある通り、創建の頃は市内に正教会を建立することは許されず、ギリシャ人の私邸中庭に建てられたものらしい。



旧市庁舎の北西側には新品同様の自転車が整列していた。黄色いガードボックス風にかかれている文字は、「無料で自転車を借りる」、「緑の革命協会」など。観光客などに無料貸し出ししているのだろう。



ヨーロッパの宿は日本と異なり、部屋に備え付けのスリッパはない。たまに使い捨てのもの(新品)が置かれていることはあるがこれも稀だ。今回の旅ではカサ・アルパートだけに置かれていた。



聖ヨアーン(洗礼者ヨハネ)教会。

聖ヨアーン通りを行くと、右手に聖ヨアーン(洗礼者ヨハネ)教会があった。外観から新しそうな印象を受けたので素通りしたが、創建は1486年に遡るらしい。

長さ300メートル弱の聖ヨアーン通が突き当たる位置に、カテドラル(ローマ-カトリック)がある。ひっそりと静まりかえっていたが、閉じられた扉を押すと中へ入ることができた。祈りを捧げる人もなく、森閑とした堂宇内でしばし時を過ごす。建設されたのは1776年から82年とのことでバロック様式らしいが、それにしては簡素だ。共産主義時代にドイツ系住民はほとんど去ってしまったから、カ

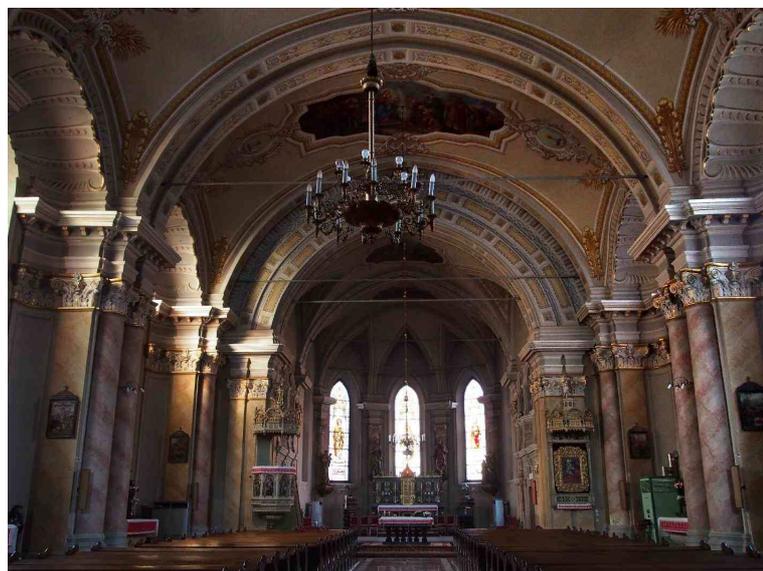
カテドラル(ローマ-カトリック)、黒の教会、聖ニコラエ教会

11月20日は快晴の朝を迎えた。今回の宿泊プランは朝食なしだ。別に料金を節約したわけではなく、最初から選択肢としてなかった。こちらへ来て判ったことは、朝食を提供するような場所がないことだ。こんな場合、シチリアなどでは提携バルの朝食券を渡してくれたものだ。しかし自分で好みのカフェに行くのも良いし、この日は朝食抜きにしてしまった。

9時半に出かける。気温は9℃だけれど、無風だし寒いことはない。宿の前から始まる枝道、



カテドラル(ローマ-カトリック)のそばで見かけた建物。由緒は判らないが立派な(多分)バロック。



カテドラル(ローマ-カトリック)。

トリック信者は激

減したと思われる。これだけの堂宇の維持費用捻出も大変なことと同情する。

カテドラルを出てすぐ前のムレシエニロル通りを南西へ行くとすぐスファトゥルイ広場があり、広場を過ぎると街路の名が、ジョージ・バリツュ通りに替わる。間もなく黒の教会があり、正面広場を掃くオバサンがいた。教会正面玄関の扉は開いていたがこのオバサンに訊くと、英語が通じなかったものの10時が開場時間と判る。

15分ほどなのでスケジュール的には待つことに問題はない。しかし漠然と此処に佇んでいるのも辛いので、他を先に回ることにした。まずスケイ門へ向かう。



ジョージ・バリツュ通りから見る黒の教会。



エカテリーナ門。



道路を横切った栗鼠。

ブラショフにおいて市民権を得られなかったルーマニア人(P.135のコラム参照)はスケイ地区に住まされた。城壁に設けられた門のうちでスケイ地区とを結ぶものがスケイ門だ。しかしルーマニア人は1918年にトランシルバニア全体がルーマニアに併合されるまで、門から市内へ入ることはできなかった。現在の門は1828年に建設されたもので趣はない。おまけに途切れることなく車が通過する。

しかし50メートルほど北側に、1559年に築造されたエカテリーナ門があり、古さもさることながら特異な姿でありながら美しく、保全状態も良い。門とセットだった城壁は既に無くなり建物に替わっている。門を通っていたであろう道路も無く、今は門(城壁)の内外が狭いながらも公園のようになっていて、此处から撮影した。

門の撮影を終えて、スケイ地区へ向かう。この地域はかつてドイツ系移民によりブラショフ中心部から排除されたルーマニア人達が移り住んだところだ。その中心部に1292年創建の聖ニコラエ教会がある。日ガイドの画像を見ると、とんがり帽子のような屋根をいくつも持ち、基本的にはゴシックと思われるが優美な姿だ。

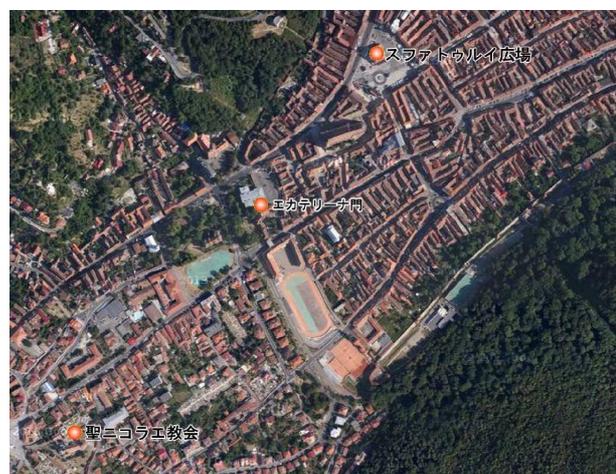
この教会を目指してエカテリーナ門からしばらく行くと前方に鐘楼の屋根が見えた。こうなれば方向音痴にとっては地図などを参照するより、この屋根を目指して行く方が確実だ。そして地図に頼らないことにした時点で、表通りを避けなるべく車の往来が少なそうな道を選んだ。

住宅地の中に続く幅4メートルほどの道を行くと、前方を栗鼠が横切った。この小動物は好奇心が強いのか、はたまた逃げ足に絶対の

自信を持っているのか、人の姿を見ても一目散に逃走するようなことはしない。そのお陰で4枚ほど撮影することができた。

ちなみに望遠ズームレンズに取り替える余裕などまるでないまま5メートルほど離れて撮影したから、掲載した画像はかなりトリミングして拡大している。

栗鼠は思わぬ出来事だったが、立ち止まったのは6、7秒のことだった。再び鐘楼をランドマークに聖ニコラエ教会を目指す。



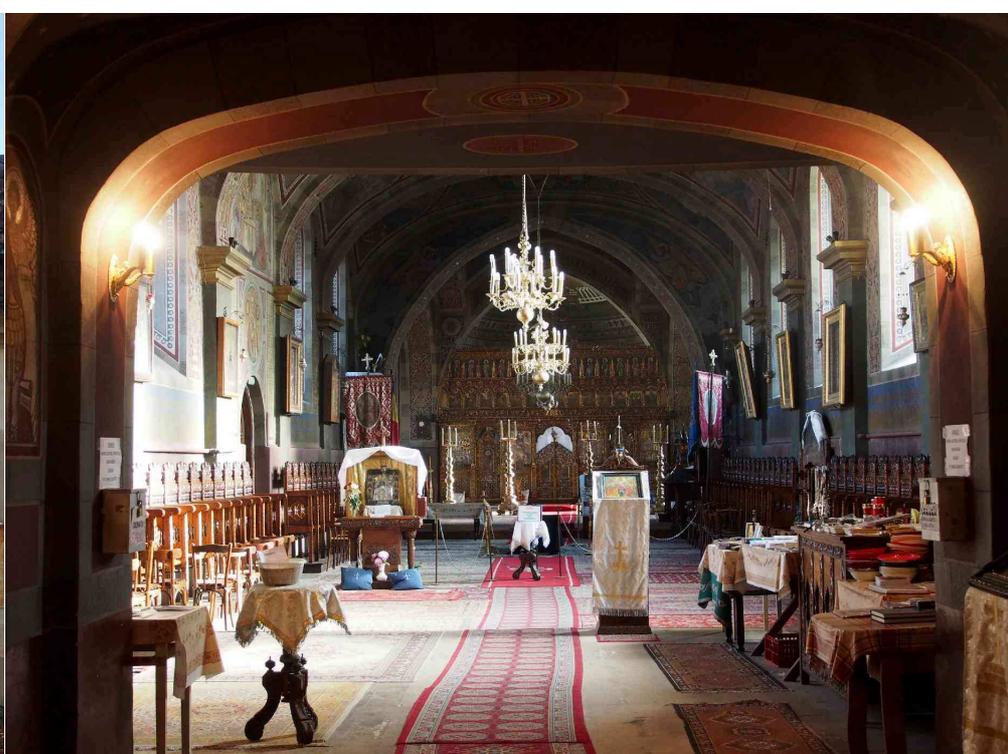
ブラショフの衛星写真(グーグル提供)。



ランドマークとした聖ニコラエ教会の鐘楼。



墓地のゲート。

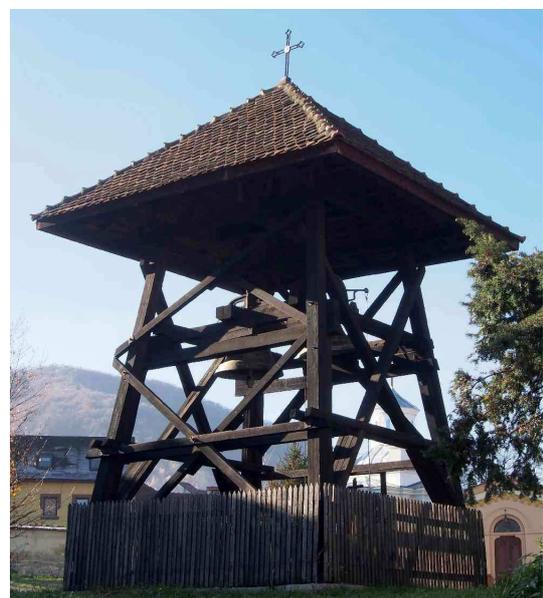


聖ニコラエ教会内部。

だいぶ遠回りをして教会の裏手から近付いた結果となった。しかし幸いなことに教会を囲う塀には裏口もあった。敷地内はおそらく元の起伏をそのまま残し、芝生が広がって明るく開放的な雰囲気になっていた。しばらく芝生の間に設けられた歩道を巡る。

「鐘撞き堂」としかいいようのないものがある。教会の本体に鐘楼がある(外観からそう思うだけで鐘の存在は目視できない)のに、地上で鐘を鳴らせるようにしてあるのも不思議だが、そもそもヨーロッパの教会で鐘撞き堂に類するものを見たのはこれが初めてだった。

教会の正面へ行くと、此处でもオバサンが一人掃き掃除をしていた。木彫装飾を施された扉は開いていたが、念のため彼女に聞いてから中へ入る。堂宇内は無人でひっそりと静まりかえっていた。イコノスタシスやほぼ全面の壁を彩るフレスコ画などは比較的地味なものだった。入口付近で二枚ほど撮影していると、そんなことを危惧してか

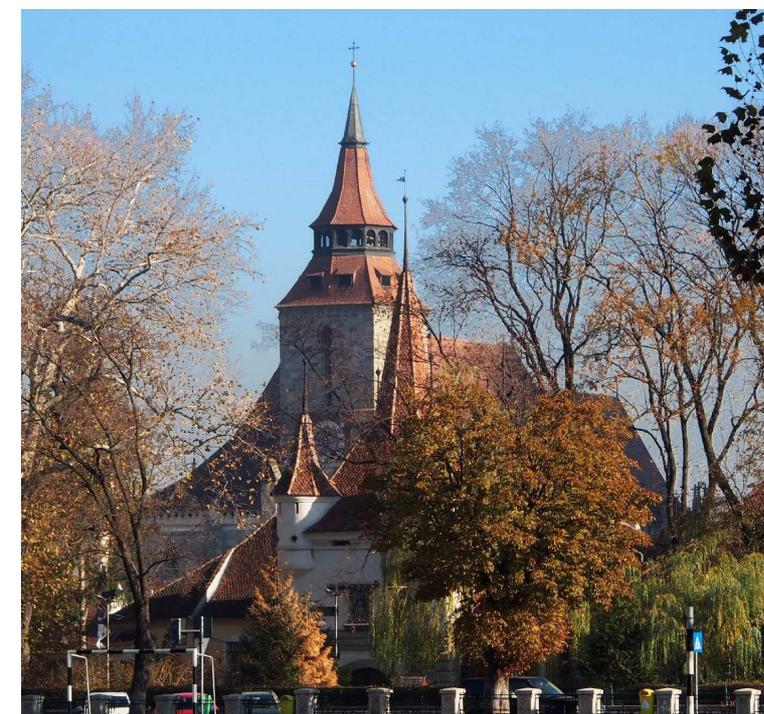


鐘撞き堂。

掃除を中断して戻ってきたオバサンに制止される。

ブクレシュティやシナイアの教会で、撮影できたのでそれが普通なのかと思っていたが違ったようだ。しかし入るとき一応は注意を払ったので撮影禁止の絵文字などはなかったはずだ。ともかくカメラを肩から掲げ、堂宇内を一巡して退出した。

教会の表参道側はウニリ広場に面している。英ガイドには広場北側にある食堂カサ・ロマネアスカ(ルーマニアの家)を推奨していたので、ちょっと様子を窺う。時刻が早過ぎたので閉まっていたが、食事時に再訪するほどの店ではないと見切りを付けた。



黒の教会遠望。



スケイ門から城内へ戻り先ほどは通らなかったスケイ門通りを100メートルほど行くと、右手に立派なシナゴグが見えた。1901年に建てられたものらしい。

しかし調べてみると、ルーマニアにおけるユダヤ人は、

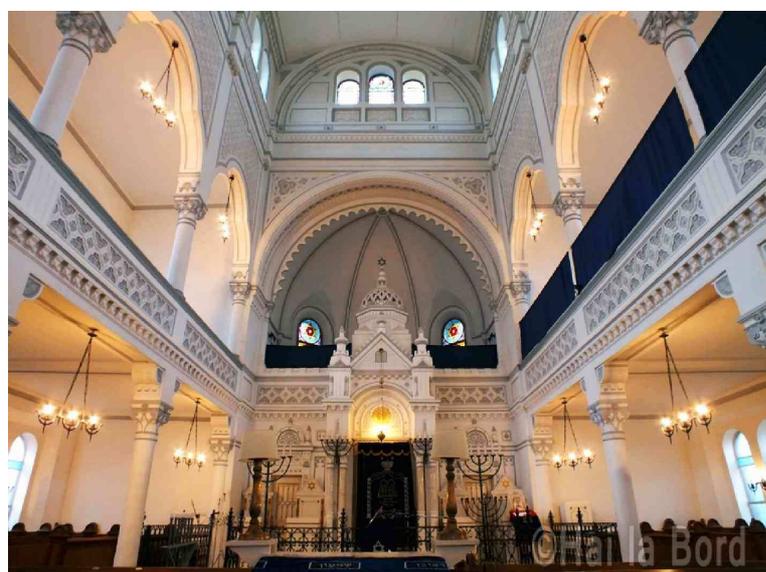
度々迫害の対象となり、第二次大戦の頃にはルーマニアの極右反ユダヤ主義民族運動の犠牲になったり、さらにはルーマニアがナチス・ドイツと同盟し、これを契機にした虐殺も数多くあった。ソ連占領後の共産主義体制になっても、ユダヤ人に対する迫害は続き、その結果ルーマニアからイスラエルへの移民が続き、現在、ルーマニアに残るユダヤ人はわずか9,000人から15,000人と推定されている。

ユダヤ人がまだ多かった1900年頃でも、主たる居住地はルーマニア北部に偏り、ブラショフになぜこれほど立派なシナゴグが現存するのか良く判らない。ともかく内部をちょっとでも見たかったが、残念なことに扉は閉ざされていた。

シナゴグから黒の教会までは1分もかからず行ける。6lei(130円)の料金を払って中に入った。「ウィーンとイスタンブール間では最大のゴシック教会」(日ガイド)に多少の期待はあったが、全くの当て外れだった。ドイツ・ルター派の教会なので期待した方が間違いだったのかもしれない。

何しろプロテスタントは使徒の教え(新約聖書)を堅く守ることが信仰であると考え、カトリックのように組織や儀式を重要視していないのだから。無信仰の私だが、思想としては共感できるものの、教会を見物する野次馬としては素っ気ないプロテスタント教会はやはりつまらない。おまけに撮影も禁止だったため、数分とどまっただけで退散する。

シナゴグ内部。インターネットより採取。



黒の教会時計塔。



スファトゥウルイ広場北側4階部分の屋根直し。

一旦宿へ戻り、昼食のために出かけたのは12時10分だった。目指したのはスファトゥルイ広場の向こう側にあるベラ・ムジカだ。昨日散歩中に雰囲気のある看板を見付け、それを詳細に見たら創業1360年と書いてあった。これだけでもかなり気を惹かれたが、その後に英ガイドを読み直し、この店を推奨しているのに気付いた。メキシコ料理も出すが、美味しいルーマニア料理が供されるとも書いてある。

店は地下にあった。煉瓦のアーチで形作られた空間は、ワイン倉庫からの転用を思わせるが、1360年創業ならば、当初から食堂を穴蔵に作ったのかもしれない。先客は若いカップルが一組だけで、ひっそり静まりかえっていた。

英文併記のお品書きからミックスサラダ、メインはラムチョップのグリルにマッシュルームのソテーを付け合わせにした。そしていつものようにハウスワインをグラスで貰おうとしたが、グラスワインはないという。それに替わるものとして見せてくれたのはワインの小瓶で200ccくらいだ。こんなものは初めて見た。日本を旅して、駅前食堂の昼酒時に、酒が一合壇で出されたりすると、「明朝会計で良いな。」と思うが、ワインの小瓶はどうもなじめない。

結局フルボトルを注文した。肝臓の許容量は問題ないけれど、胃袋の許容量は超えるので辛いことになった。かててくわえて、サービスなのか注文しないサルサとトポスが前菜として出て来る。供されたものを食べ残すまいと思うのは、単なる意識という以上に体に染みついて体質となっている。ともかくじっくり時間を掛けて着実に片付けていった。

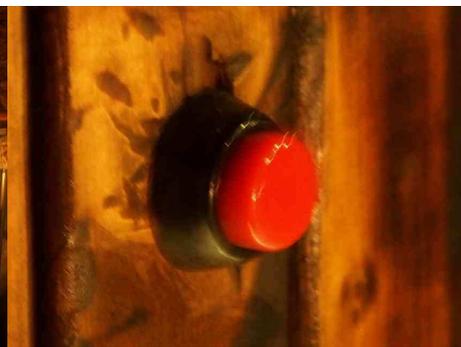
ボトルで出されたワインはトレイヘクターレ (Trei Hectare: 3ヘクタール) なる銘柄で、「ワイナリー内の厳選された3ヘクタールの畑に限って手塩をかけて育てたブドウを使ったワイン。」だそうだ。高級ワインらしいが、ともかく気持ち良く飲むことができた。

ほぼ1時間掛けて注文したものはすべて胃の腑に収めた。後はカプチーノなどを飲む余裕もなく、一休みして勘定にする。サラダ9lei(195円)、ラム56.5lei(1,225円)、付け合わせマッシュルーム12lei(260円)、ワイン1壇65lei(1,410円)など。

ほぼ完食だが、サルサとトポスは残った。



一応高級レストランで食器などもそれなりに良質なのに、なぜかフォークはステンレス板をプレス加工したもので、へなへなだった。



上左:ベラ・ムジカの店内。上右:ウェーター呼び出しボタン? 中左:サルサ?ともう一品が注文しないのに出された。中右:サルサ用のトポス。下左:ミックスサラダ。下右:ラムチョップ。